



高良興生院の思い出

わたなべ
渡邊

なおき
直樹

(メンタルホスピタルかまくら山・名誉院長)

わたしが医学部を卒業したのは39歳の時でした。その後岩井 寛先生に師事して聖マリアンナ医大に入局(昭和57年6月)、岩井先生に伴われて週1回高良興生院にお邪魔しました。そのころのわたしは森田療法についてはなにもわからず、いい加減な人間でした。そして当時は多くの患者様が院生として入院中であり、にぎわっていました。一緒に卓球をしたことも楽しい思い出です。

しかし苦い思い出もあります。その一つがいわゆる「睨めっこ事件」というものです。それは赤面恐怖の患者様に「にらめっこしたら?」と提案してしまい、激怒されてしまったことです。他の患者様も一堂に集まり、その人たちの前で追及されました。わたしはただ平謝りするしかありませんでした。その時岩井先生が傍にいて、サポートしてくれたのを覚えています。先生は淡々と話を聴き、その発言のわけを正そうとしてくれていたように思います。

いま思えば神経質の患者さまからは、自分たちがこのいい加減な研修医に馬鹿にされたとうけとめたようであり、かなり手厳しい追及を受けました。患者様の想いをなんら受け止めることができなかった自分は失格だなと思いました。そしてどのような治療的なアドバイスをすべきであったのかなどいろいろ考える契機を与えてくれました。その意味では興生院での研修は自分にとってはとても有意義であったと思います。

そしていまでも森田療法って何なのだろうと問い続けています。宇佐玄雄先生は鼻尖恐怖の患者さんに数日間鼻尖だけを眺めるように指示して治ったなど。しかし一番納得できたのは「森田の家」のHPでみた森田自身のことばでした。「なんでもこれを治そうと思う間は、どうしても治らぬ。治すことを断念

し、治すことを忘れたら治る。」つまりなんとか治そうといろいろ考えることをやめることが唯一治る方法なのであると初めて気づきました。

いろいろ悩みを訴える患者様は、実はその背景になんとか治したい、どうしようかなどという思考が働いていると思いました。この思考をストップさせるために、自然に目を向けたり、作業をするのだと思いました。つまりこれは人間の「生の欲望」を見出し、賦活する作業だと思いました。

興生院ではそのほか看護師さんたちのやさしい接し方を学び、中庭の草木に囲まれた緑豊かな自然の中で、黙々と落ち葉を集めている患者さんの様子を目にしました。また高良先生とは直接お話しする機会はなかったのですが、院内で歩いている後姿を拝見したり、数十人の院生たちへの講話を拝聴しました。淡々と話されそして院生たちは一言ももらすまいと熱心に耳を傾けていました。

また高良先生が時に院生と卓球をしている光景も目にしました。まためでたく退院となる院生に対して阿部先生と森口婦長さんが門のところで見送るという態度がとてもいいと思いました。このような患者様と同等の立場を大切にする態度はいまでもわたしの中に生きています。そしてここかまくら山でもこれらの習慣を引き継いで実行しています。

ここかまくら山ではいわゆる「修正型森田療法」と内観を行っています。内観は奈良の内観研修所から体験しました。畳半畳の空間に座し、ある対象に対して、「お世話になったこと」、「して返したこと」そして「迷惑をかけたこと」の3項目を想起する作業を行い、一日に5回以上訪室する面接者に報告します。7日間であり、森田の臥褥がじよくと似た体験と思われ、自己の自然な記憶と感情を引き出す作業と思いまし

た。森田療法の第 1 期の臥褥に代わって集中内観を行い、引き続き森田療法の第 2 期を行うことが効果的と思われました。

現在このような形での「内観・森田療法」をここかまくら山で行うことができていることは大変ありがたいことと思っています。実はコロナの影響で慈恵医大は入院療法を行っていないので当院に患者様を紹介していただいております。患者様にも恵まれています。志を同じくする医師や看護師にも恵まれ毎日活動を続けています。様々な先生方の想いを引き継いでいまの自分があると思っています。

興生院の先生方同様、患者様と一緒に活動するこ

とを心がけ、かまくら山では「もりたの会」というのを行っています。すなわち毎週木曜日にスタッフも患者様と一緒に、それぞれが自分のペースで院庭に出向いて周囲の草花や昆虫、リスやカラスやトンビなどの動物、そして空の高さや移ろいゆく風景に目を向け、体験したことを絵にしたり、文字にする。そしてみなで分かち合ったあとはマインドフルネス体操で自己の身体の動きを体験する時間と場所です。

誰かに指図されて行うのではなく、自分なりの体験を目指すのです。森田のこぼれを金科玉条にしているわけではなく、自分自身に毎日問いかけながら森田療法を身に着けていきたいと思っています。

森田先生と犬神憑き

だいぐうじ まこと
大宮 信 (北翔大学)

今から 50 年ほど前のある秋の日の朝、筆者を含む北大出身の 4 人の新人精神科医が 1 冊の本を小脇に抱え山下格先生 (当時: 助教授) の部屋で緊張してクルズスの開始を待っていました。これが筆者と森田療法・森田正馬先生との初めての出会いでした。

精神薬理や精神分析領域に造詣の深い山下先生でしたから、もちろんその方面の教育・薫陶も受けたのですが、筆者たち新人が精神療法の勉強の初めに森田療法の手ほどきを山下先生から受けたのは今考えるとやや意外だったようにも思います。

筆者たちが小脇に挟んでいた本は、森田先生の「神経質の本態と療法」でした。この本を学び、山下先生の外来診察に陪席する中で、明確に言葉に出すことはなさらないながらも、「精神交互作用」・「あるがまま」という言葉を先生の診察の中にかぎ取ったものでした。そしてそれは今にいたるまで筆者の精神療法の中に基本として流れております。

言葉に表さなくても、患者様のお一人お一人が自分を受け入れ、「この自分で良い」と思って頂くことは、森田療法を専門的に学んだわけではないので自信がありませんが、心の健康を取り戻す基本の 1 つのように思います。

さて森田正馬先生との出会いは、筆者個人にとっ

てはその後もっと大きな形で顕れて来ました。それは祈禱性精神病という病気についてです。森田先生のあまりにも有名な業績ですし、近々自著が上梓される運びになっておりますので (祈禱性精神病一憑依研究の成立と展開, 日本評論社、2022 年 12 月発刊予定) 詳しくは述べませんが、ひとつふれておきたいのは森田先生の出身地のことであります。

多くの方々は森田先生の生地を訪れたご経験をお持ちと思います。森田先生のお仕事の出発点であるご自宅近くのお寺にあった地獄絵図との出会いはあまりにも有名でありましょう。

筆者は憑きものの研究を進める中で森田先生の祈禱性精神病と出会い、さらにそのルーツが、先生の若き日のご自身の故郷である土佐の犬神憑き調査であったことを知りました。この調査については森田全集にコンパクトに触れられているのですが、さらに詳しく知りたいものと願い、岩田真理先生 (お茶の水セラピールーム代表) のご教示とお導きにより、高良興生院・森田療法関連資料保存会から格別のご厚意を頂いて、森田先生自筆の日記資料を拝見する機会に恵まれました。

明治時代の旧書体で、しかも自在にお書きになっている日記と言う文書であります。旧仮名遣い・先生

ご自身だけしかわからない個人名など、判読するのに大きな苦勞を要しました。従って完璧に読解したわけではないのかもしれませんが、それでも筆者としては重要なこととして感じ取ったことがあります。それは森田先生のご生家からそれほど遠くない、当時犬神憑き信仰の中心的な地域・物部(ものべ)と先生との関係であります。

今般拝見出来た自筆日記によりますと、森田先生はこの犬神憑き調査の真っ先にこの物部という地域を選んでおられます。ここは後に「いざなぎ流」と名付けられるようになる独特の民俗信仰を古くから保持していた地域で、多くの研究の対象になりました。

その中核となる大栃という地域は、森田先生の生家のある野市のいちとは現在車で小1時間、距離にして約50kmほどで、あまり離れていません。後にいざなぎ流と呼ばれる民俗宗教の実践者(「太夫」と呼ばれる人々)をはじめとする、いわば「いざなぎ流文化」の影響が先生が住んでおられた地域まで及んでいたと捉えるのはそう不自然ではないように考えます。

また先生ご自身は触れておられないようなので想像になりますが、もしそうだとすれば、森田先生の成

長過程の中で何らかの影響を受けられた可能性を考えます。そして先生のつきもの研究、後の祈禱性精神病提唱のなかで、またそのご生涯の中に、いわば通奏低音のように流れていったのではと想ったりします

勝手な想像も含みますが、今般このような考察の地平にまで自分なりにたどり着くことができたのは、ひとえに高良興生院・森田療法関連資料保存会の応援をいただいたことによります。森田先生のように多方面に亘って著名な人物の研究を目指す人たちの中には、森田療法だけでなく、違う方向から接近する筆者のような研究者も少なくないのではないのでしょうか。

資料はそのままにしておけば、放置され、やがては散逸してしまいます。これからも森田先生のような大きな人物に関する資料は集約して保存されていかれる事がとても大事なのではないかと思います。筆者のような森田療法の門外漢が言うのはおこがましいのですが、森田先生の広いご業績を考えると、今般その恩恵を受けた者のひとりとして、関連資料をこれからも大事に保存して行っていただきたいものと願っております。

#####

高良先生の「木曜講話」を YouTube で公開

高良武久先生が亡くなられてから、もう26年が経つ。高良先生は、木曜日に入院生を集めて「木曜講話」を開催していました。詳しくは白揚社から出ている『高良武久著作集』第七巻に収められていますが、これを読んでみると、一方的な講話だけではなく、高良先生が患者に詳しく症状を訊き、患者とやりとりをしている内容が多く載っております。

このたび、この「木曜講話」をカセットテープに録音したものをCD化したことがきっかけとなって、高良先生の声を YouTube に公開しました。ただ、1988年のもので雑音が気になりますが、3話あり、各30分前後で、下記HPからお聴きください。



・保存会ホームページ：

<http://www.hozonkai.net/>

「トップページ」→「講演情報」

◎「木曜講話」について

『高良武久著作集』第七巻386頁の「解説」によれば、この本に収録されているものは、1973年から80年にかけての講話を、生活の発見会会員が録音によって再生したもので、『生活の発見』誌の1974年1・2月号合併号から80年7月号まで連載されたものとなっております。

(文：藤田嘉信)

写真：入院生とミニゴルフに興じる高良先生

高良留美子資料室訪問記

なかきこ よしお
中浴 佳男（高良興生院・森田療法関連資料保存会）

前号でお知らせしたとおり高良武久先生の次女で、詩人で女性史研究者として活躍された高良留美子さんが昨年12月12日に亡くなりました。

このたび故人の蔵書をもとに旧宅が高良留美子資料室として公開されるとのお話を聞くに及び9月27日保存会スタッフ3名で見学させていただきました。旧宅は東急東横線・大井町線自由が丘駅から徒歩15分の閑静な住宅地にあるマンションの一室にあります。留美子さんの長女である竹内美穂子さんにご案内いただきました。

亡くなられたときには故人が創作活動や研究活動に用いた各種資料が足の踏み場もないほど散乱していたのですが、それらがテーマ別に仕分けられ綺麗に配架されておりました。所蔵する資料は故人のご著書、直筆資料を中心に、研究活動に使用された学術書、ご家族やご縁戚関係者の資料など多岐に及びます。これらの資料を学生や研究者の方の研究

活動に生かしてもらいたいとのことでした。資料は神奈川県近代文学館に寄贈される方向とのことですが、故人が住処とされた場所での公開は意義深いものがあると感じました。

資料室ホームページが公開されました。閲覧すると資料室の雰囲気を感じることが出来ます。利用の場合は予約制で、ホームページの問い合わせフォームから予約してもらいたいとのことでした。

連絡先は以下のとおりです。

〒152-0023 東京都目黒区八雲3丁目29-20
アルス八雲104号室

・「高良留美子資料室」ホームページ

<https://korarumiko.wordpress.com/>

（下記QRコードからも接続いただけます。）



海 鳴 り

ふたつの乳房に 静かに^{みなぎ}漲ってくるものがあるとき
わたしは遠くに かすかな海鳴りの音を聴く

月の力に引き寄せられて 地球の裏側から満ちてくる海
その繰り返す波に わたしの砂地は洗われつづける

そうやって いつまでも わたしは待つ
夫や子どもたちが駆けてきて 世界の夢の渚で遊ぶのを

◎高良留美子著 詩集『見えない地面の上で』（1970年）より

■編集／発行	高良興生院・森田療法関連資料保存会
◇連絡先	〒161-0032 東京都新宿区中落合1-6-21 就労センター「街」内 ☎03-3952-9975 <u>ただし、火、水、木、金、土曜日の10時から16時まで。</u>
◇電子メール	info@hozonkai.net
◇ホームページ	http://www.hozonkai.net/